



TITLE:

マムルーク体制とワクフ--イクター 制衰退期の軍人支配の構造

AUTHOR(S):

五十嵐, 大介

CITATION:

五十嵐, 大介. マムルーク体制とワクフ--イクター制衰退期の軍人支配の構造. 東洋史研究 2007, 66(3): 505-475

ISSUE DATE:

2007-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/138225>

RIGHT:

マムルーク体制とワクフ

——イクター制衰退期の軍人支配の構造——

五 十 嵐 大 介

- I は じ め に
- II ワクフ設定者／受益者としてのマムルーク
 - 1 ワクフ制度の発展とマムルーク
 - 2 ワクフ設定の在り方：財産保有手段として
- III 管財人としてのマムルーク
 - 1 利権としての管財人ポスト
 - 2 マムルークの管財人職掌握
- IV ワクフ財賃借人としてのマムルーク
 - 1 土地賃貸借の広まり
 - 2 土地賃貸借拡大の意味
- V お わ り に

I は じ め に

イクター (iqṭāʿ) 制は、10世紀のアッバース朝分裂以降、異民族出身の軍人集団が支配層を構成する「軍事的支配体制⁽¹⁾」の時代を迎えた東アラブ世界（マシュリク）において、国家と社会の基本的枠組みを規定した軍事・土地制度である。すなわち、軍事奉仕の対価として国家の土地税徴収権を授与するこの制度を通じ、国家の次元では、軍人支配層内部の権力関係と紐帯の在り方を規定するとともに、それを基礎とする政治・軍事・行財政制度を成立させ、国家体制の基軸となった。また社会全体に目を向ければ、イクター保有を通じて農村を支配下に入れた軍人層が、そこから生み出される富を都市に環流させる

(1) 軍事的支配体制については、嶋田襄平『イスラムの国家と社会』岩波書店、1977: 4章；佐藤次高「西アジアにおける中世世界の成立」『中世史講座1：中世世界の成立』学生社、1982；清水和裕『軍事奴隷・官僚・民衆：アッバース朝解体期のイラク社会』山川出版社、2005: 6-14.

力を独占し、その再配分を通じて食糧供給・公共事業・経済活動・宗教活動を掌握・コントロールし、農村と都市の両方を支配する、その支配構造の基幹を成した。爾後発展を続けたイクター制は、マムルーク朝（648-922/1250-1517）統治下のエジプト・シリアで実施された「ナースィル検地（al-rawk al-Nāṣirī : 713-25/1313-25）」を通じて、より精緻に制度化・体系化された。ここに至り、イクター制を基礎とした軍事的支配体制は、同王朝のもと、より高度に体系化された「マムルーク体制」として一つの頂点に達したのである⁽²⁾。

しかし、14世紀後半にこの地域を襲ったペストの大流行による社会経済的変動と、それと同時期に起こった政治的混乱を契機として、イクター制は以後その制度的弛緩が顕著な衰退の時代を迎えることとなった。特に土地制度上の重要な変化が、ワクフ（waqf; pl. awqāf : 寄進）財源として設定された農地、「ワクフ地」の急激な増加である⁽³⁾。この時代を境に、スルターンや有力アミールの手によって多くの農地が国庫（Bayt al-Māl）から私有地として獲得され、その後ワクフに転換された。それは国家が租税を徴収したりイクターとして分与されるべき「国有地（amlāk bayt al-māl）」が侵食されることを意味し、イクター制に依拠した国家体制に重大な悪影響を与えるものであった。このため歴代の政

(2) マムルーク体制とは一義的には「マムルーク出身の軍人が国家の枢要部を占め、イクター保有を通じて農村と都市を支配する体制」と定義し得るが（佐藤次高『中世イスラム国家とアラブ社会：イクター制の研究』山川出版社、1986: 232）、本稿ではそれに加え、先に述べた軍人によるイクター支配を軸とした軍事的支配体制下の総体的な国家・社会構造が、マムルーク朝の支配の下でより高度に体系化されたものとしてそれを位置づける。イクター制の成立と発展、およびマムルーク体制の成立については、Sato Tsugitaka, *State and Rural Society in Medieval Islam: Sultans, Muqta's and Fallahun*, Leiden, 1997: chaps. 2-4, 6; 佐藤前掲書: 1-2部。都市におけるマムルークの経済的影響力と社会的役割については、I. M. Lapidus, *Muslim Cities in the Later Middle Ages*, Cambridge, 1967: 44-78。

(3) E. Ashtor, *A Social and Economic History of the Near East in the Middle Ages*, Berkeley and Los Angeles, 1976: 318; A. N. Poliak, *Feudalism in Egypt, Syria, Palestine, and the Lebanon, 1250-1900*, London, 1939: 36-39; 'I. B. Abū Ghāzi, *Tatawwur al-Hiyāza al-Zirā'iya Zaman al-Mamālīk al-Jarākisa: Dirāra fī Bay' Amlāk Bayt al-Māl*, Cairo, 2000: 104-107; A. Sabra, "The Rise of New Class? Land Tenure in Fifteenth-Century Egypt: A Review Article," *Mamlūk Studies Review*, 8/2 (2004): 204-206; Y. Frenkel, "Agriculture, Land-tenure and Peasants in Palestine during the Mamluk Period," U. Vermeulen and J. Van Steenberghe (eds.), *Egypt and Syria in the Fatimid, Ayyubid and Mamluk Eras* 3, Leuven, 2001: 200-202.

権はしばしばワクフの統制や組織的な解消を試みたものの⁽⁴⁾、「イスラームの慈善」と位置づけられていたワクフが非合法化されたり抑制されることはなかった。国有地の私有化・ワクフ化はチュルクス・マムルーク朝時代（784-922/1382-1517）を通じて進行し、王朝滅亡時には、一説にはエジプト全土の二十四分の十とも言われる農地がワクフとなっていたとされる⁽⁵⁾。

かかる土地制度上の変容は、イクター制を基軸として構成されていた既存の国家機構を機能不全に陥らせ、行財政制度上の改革・再編を余儀なくさせたのみならず⁽⁶⁾、マムルーク体制そのものの在り方にも多大な影響を与えた。それは、マムルークの収入基盤であるイクターの侵食・縮小によって彼らが経済的打撃を受けた、という次元に止まるものではない。ワクフとは、都市に設立された宗教・公益施設（ワクフ施設）とその財源として設定された農地・都市不動産（ワクフ財）が独立した一個の「経営体」を成し、ワクフ施設を核として富を集積し、それを俸給や施しといった形で都市社会に再配分するシステムであった。そしてワクフ制度の隆盛がかかる「経営体」の絶対数を増加させ、同時に多数の農地がかかるシステムに組み込まれたことは、ワクフの社会的役割の更なる増加につながった。すなわち、マムルーク体制の根幹が、イクター保有によって軍人支配層が農村から獲得した富を都市へと環流させる力を独占したことにあったと想起すれば、国家による直接的な統制からは基本的に独立したワクフが、このように都市と農村を結び付ける自律的な富の再配分システムとして発展し、その役割を拡大したことは、従来のイクター制と軍人支配層の社会的役割を相対化し縮小させることに繋がるといえよう。ワクフの経済面で

(4) 拙稿「後期マムルーク朝におけるムフラド庁の設立と展開：制度的変化から見るマムルーク体制の変容」『史学雑誌』113/11（2004）：6-8；同『『国有地ワクフ』をめぐるイスラーム法上の議論：12～16世紀』『東洋学報』88/4（2007）：028-040。

(5) M. M. Amīn, *Al-Awqāf wa-al-Hayāt al-Ijtīmā'īya fī Miṣr 648-923 A.H./1250-1517 A.D.*, Cairo, 1980: 98; M. 'Aḥīf, *Al-Awqāf wa-al-Hayāt al-Iqtisādīya fī Miṣr fī al-'Aṣr al-'Uṯmānī*, Cairo, 1991: 27. ワクフと国家との軋轢については、Y. Lev, *Charity, Endowments, and Charitable Institutions in Medieval Islam*, Gainesville, 2005: 153-156.

(6) 拙稿「ムフラド庁の設立と展開」；同「後期マムルーク朝スルターンの私財とワクフ：バルクークの事例」『オリエント』47/2（2004）。

の働きについてはこれまでも論じられてはきたが、それをあたかも自己完結的なシステムのごとく捉えてその社会的経済的役割を議論したり、またそれを総合的な土地制度と社会構造を見ていく上でイクター制社会の「例外」と扱うのでは不十分である。ワクフの拡大と社会的重要性の高まりが既存のマムルーク体制をどのように変容させたのか考察するとともに、それを内在化した国家と社会の全体的な仕組みを明らかにする必要がある。

かかる問題関心のもと、本稿では、ワクフの規模が急速に拡大し、その社会的役割が無視し得ない段階に達した14世紀末から16世紀初頭のエジプト・シリアにおいて、軍人支配層たるマムルークがワクフと如何に関わっていたか、特に経済的側面について叙述史料と文書史料から考察する。それを通じ、かかる土地制度の変容の中で、イクター制に立脚していたマムルークが如何にしてその権力と支配を維持し得たのか明らかにする。以上の考察を通じ、イクター制を基礎とした軍事的支配体制の最終的な行方を見極め、新たに「ポスト・イクター制時代」の国家と社会を見る上で基本となる枠組みを提示したい。

Ⅱ ワクフ設定者／受益者としてのマムルーク

1 ワクフ制度の発展とマムルーク

農地や都市不動産の所有権を「停止 (waqafa)」し、その収益を特定の慈善的目的に支出するワクフ制度は、イスラーム時代初期より存在したものの、それが飛躍的に普及・発展し大規模化したのは12世紀以降のことである。すなわち、この時代の所謂「スンナ派復興政策」のもと、軍人支配層がマドラサ、ハンカー、病院といった宗教・公益施設建設を積極的に推進したが、その設立・運営を支えたのがワクフ制度であった。かかる施策は、被支配層から隔絶した外来者である軍人支配層が、「イスラームの守護者」としての姿を示すことによりウラマーの支持を獲得し、支配の正当性を支えるという役割を果たした⁽⁷⁾。また、宗教・公益施設と財源のための商業施設や賃貸住宅の建設が都市の発展

(7) Amīn, *op. cit.*, 71; 三浦徹「ダマスクスのマドラサとワクフ」『上智アジア学』13 (1995): 30.

を支えるとともに、その増加・拡大がワクフの経済的、社会的、文化的役割を高めたのである⁽⁸⁾。それとともに、古典的ワクフ理論ではワーキフ (wāqif: ワクフ設定者) の私有財 (milk) のみがワクフに設定可能であるとされていたのに対し、国家が徴税権を持つ土地をワクフ財源に設定する「国有地ワクフ」の手法が生まれ、ワクフの大規模化を促したのである⁽⁹⁾。

さて、先行研究によれば、ワクフ施設の建設者／ワーキフの大部分が軍人支配層とその一族に属していた⁽¹⁰⁾。15世紀にイスラーム法廷文書の書式便覧を著したアスユーティー al-Asyūṭī もまた、ワクフに関する解説の中で以下のように述べる：

「原則 (qā'ida) : ワクフは大部分において君主 (malik) もしくはスルターン、総督 (kāfil mamlaka sharifa)、百騎長の有力階級 (a'yān al-umarā' al-muqaddamīn) に属するアミール、もしくは彼ら [と同等の] 地位にある者以外 [による設定] を起源とすることがないことを知れ⁽¹¹⁾」

そこには、大規模な農地を国庫から獲得したり、都市の既存の建築物を接収し、新たなワクフ施設や財源とする経済施設を建設するには、経済力のみならずそれを可能とする政治的影響力と強制力を備えていることが必要不可欠であり、軍人支配層のみがそれを果たし得たという現実があったといえよう⁽¹²⁾。

さて、ワクフ制度は14世紀後半のペストの大流行と政治的混乱を背景に、マムルークの財産保有手段として積極的に利用されるようになったことから、更なる発展を遂げた。すなわち、ペストによる農村人口の減少と農業生産の低下によってイクター収入の減退に直面したこの時代の有力アミールたちは、その

(8) マムルーク朝期のワクフに関する総合的な研究として、Amīn, *op. cit.*

(9) 拙稿「『国有地ワクフ』をめぐるイスラーム法上の議論」026-028.

(10) Lapidus, *op. cit.*, 73-74, 195-198; S. Denoix, “Pour une exploitation d'ensemble d'un corpus: les waqfs mamelouks du Caire,” R. Deguilhem (ed.), *Le waqf dans l'espace islamique: Outil de pouvoir socio-politique*, Damascus, 1995: 34-35; 三浦前掲論文, 29-30.

(11) *Jawāhir*, 1: 321-322.

(12) 勿論ウラマーや商人等の手によるものや、施設建設を伴わない小規模なワクフも存在した。しかし社会構造全体から見たワクフの経済的役割を議論する場合、ワクフ財の規模で他を圧倒していた軍人支配層によるワクフを中心に見ていくことが適切であろう。

損失をカバーすべく、政府直轄地の賃借や購入、イクターの獲得・私有化などによって、より多くの農地を個人的資産として獲得することに努めるとともに、しばしばそれらをワクフに設定した⁽¹³⁾。それはまた、相続による財産の細分化を防ぐとともに、それを「宗教的寄進財産」とすることで課税や財産没収を逃れることを意図したものであった⁽¹⁴⁾。しかも、自身の財産をワクフに設定したとしても、ワーキフ自身が「管財人 (nāzir)」として引き続きそれを管理運用し得たため、(ワーキフの生存中) これらの資産は事実上、彼の「所有」のもとに留まったのである。国有地から分離されたこれらの土地は、課税やイクター分与の対象から外され、国家の統制が及ばなくなった。そしてこれらのワクフは、ワーキフの設定した条件に基づいて個別に運営される「民営ワクフ (awqāf ahliya)」として、政府のアフバース庁 (Dīwān al-Aḥbās), ワクフ庁 (Dīwān al-Awqāf) による管理からも除外されたのである⁽¹⁵⁾。こうして進行したワクフ地の増加について、マクリーズィー al-Maqrīzī は以下のように述べる：

「その(民営ワクフの)収入はトルコ人の王朝(＝マムルーク朝)において生じたマドラサや金曜モスクや墓廟その他の建設によって、その多さにおいて限界を超えた。彼らは不毛の地をも含むエジプトやシリアの各地の土地を[国庫から]分離させ、名目を整え、その名目をもってそれらの土地を所有し、彼らが望むように様々な支出に対して[その土地を]ワクフに設定したのである⁽¹⁶⁾。」

(13) 拙稿「ムフラド庁の設立と展開」4-8; 同「スルターンの私財とワクフ」22-24。ベスト流行がエジプトの農業生産に与えた影響についての最新の研究として、S. J. Borsch, *The Black Death in Egypt and England: A Comparative Study*, Cairo, 2005。

(14) Amīn, *op. cit.*, 72, 92-93; 三浦前掲論文, 30。

(15) マムルーク朝におけるワクフの分類と国家管理の問題については、Ito Takao, “Aufsicht und Verwaltung der Stiftungen im mamlukischen Ägypten,” *Der Islam* 80 (2003): 51-62; D. Behrens-Abouseif, “WAKF, II: In the Arab Lands, 1: In Egypt,” *EI*², 11: 65。なお比較的ワクフの規模が限られていたセルジューク朝、ファーティマ朝、アイユーブ朝までは、カーディーや政府のディーワーン (dīwān: 官庁) によってワクフの一元的管理が行われていた。H. Rabie, “Some Financial Aspects of the Waqf System in Medieval Egypt,” *Al-Majalla al-Tārikhiya al-Miṣriya* 18 (1971): 10-11; Amīn, *op. cit.*, 48-68; A. K. S. ラムトン (岡崎正孝訳) 『バルシアの地主と農民』岩波書店, 1976: 67。

(16) *Khiṭaṭ*, 4: 178. cf. Amīn, *op. cit.*, 118。

こうして14世紀後半以降のエジプト・シリアは、イクター制を基本とした土地所有形態から、ワクフ地の継続的増加という新たな局面を迎えたのである。

2 ワクフ設定の在り方：財産保有手段として

ワクフ設定の在り方としては、第一に、ワーキフ自身や子孫を直接の受益対象として設定する、所謂「家族ワクフ (waqf dhurri/ahli)」の形態が挙げられる。実際に、マムルークによって設定されたこの類のワクフの設定文書が残存している⁽¹⁷⁾。例えば百騎長 (amīr mi'a muqaddam alf)・官房長 (dawādār kabīr) のジャーニベク Jānibak nā'ib Judda (d. 867/1463) は、四十騎長 (amīr al-ṭablkhāna) 位にあった頃よりエジプト・シリアの多くの農地を国庫から購入し、それをワクフに設定したとされ⁽¹⁸⁾、それは実際の文書からも裏付けられる⁽¹⁹⁾。財産保有手段としてワクフ制度を利用する場合、かかる設定の在り方が最も直接的な手法といえる。しかしこうした「家族ワクフ」の大部分は、現存するワクフ文書を見る限り、ワクフ財が数点に過ぎない小規模なものに止まっている。それに対し、宗教・公益施設の建設とセットになった、所謂「慈善ワクフ (waqf khayrī)」の範疇に属するワクフは、多数の物件を財源に持つ、はるかに大規模なものであった。そしてこれらのワクフにおいてもほとんどの場合で、ワーキフと子孫が受益対象に組み込まれていた⁽²⁰⁾。ワーキフは、ワクフ財からの収入を、まずワクフ財それ自体の維持費に、次いで対象となるワクフ施設の維持運営費、人件

(17) Cf. WA, q1143; j450r (1 Rabī' al-Awwal 879); DW, 16/99; 16/104r (2 Jumādā al-Ākhira 848); 20/121; 20/122v (7 Jumādā al-Ākhira 868); 21/130v (9 Rabī' al-Awwal 866); 23/152; 24/153v (8 Sha'bān 874); 25/162; 27/170. al-Asyūṭīはかかるワクフ設定の在り方を「歴代の君主やスルターンの慣習」と述べる [Jawāhir, 1: 322]。

(18) *Hawādith*¹, 803. また彼は官房長職にあった一年に満たない期間にも、10万ディーナール (dn) 分もの土地を購入したという [idem, 568]。

(19) 彼は864年ジュマダーI月19日に、エジプトのal-Gharbiya県・al-Daqahliya県・al-Jiziya県にある土地片を計1,550dnで国庫から購入し、後にそれを自身を受益対象とするワクフに設定した [DW, 20/122]。また866年ラビーI月2日にダマスクス州のal-Quds県の一村をイスティバダール (istibdāl: 交換) によって獲得し、9日に同じく自身へのワクフに設定している [DW, 21/130]。

(20) Amīn, *op. cit.*, 72-79. 自身や家族のための墓廟の建設を伴うこともあった (A. Sabra, *Poverty and Charity in Medieval Islam: Mamluk Egypt, 1250-1517*, Cambridge, 2000: 98-100)。

費に支出する。その後、余剰をワーキフ自身のものとし、没後は子孫、妻や親族らを優先順位を定めて手当を支給し、断絶後は貧者等に分配する、という条件を設定した。そして、しばしば最初から施設の必要支出を賄う以上の大量の物件をワクフ財源としたり、ワクフ財源に次々と物件を追加していくことにより、余剰収入を増加させ、自身の懐に直接入る財貨を確保したのである⁽²¹⁾。例えばアターバク (atābak al-'asākir: 総司令)・シャイフ Shaykhū al-Nāṣirī (d. 758/1357) がカイロ市外に建設した巨大なマドラサとハーンカー (al-Madrasa/al-Khānqāh al-Shaykhūniya) は、エジプト・シリアの多くの農地をワクフ財源として持ち、施設の必要経費を超える巨額の余剰収入が蓄えられていた⁽²²⁾。以上のようなワクフ設定の在り方からは、慈善的支出の中に個人的利益を組入れた、巧妙な財産保有手段としての側面を見ることができよう⁽²³⁾。ワクフ制度のこのような利用は、アミールに限られたものではなく、スルターン自身も行った。前述した14世紀後半以降の行財政機構の機能不全を背景に、スルターンは国家財政から独立した個人的収入源の確保に力を注いだ。チェルケス・マムルーク朝初代スルターン・バルクーク al-Ẓāhir Barqūq (r. 784-91, 792-801/1382-9, 1390-9) による私有地の獲得とワクフ設定、そしてそれらを管理する「私有地・ワクフ・ザヒーラ庁 (Dīwān al-Amlāk wa-al-Awqāf wa-al-Dhakhīra)」の設立を嚆矢として、

(21) C. F. Petry, *Protectors or Praetorians?: The Last Mamlūk Sultans and Egypt's Waning as a Great Power*, Albany, 1994: 199-200, 202-203; id. "Waqf as an Instrument of Investment in the Mamluk Sultanate: Security vs. Profit?" Miura Toru and J. E. Phillips (eds.), *Slave Elites in the Middle East and Africa: A Comparative Study*, London and New York, 2000: 104-105; J.-C. Garcin and M. A. Taher, "Enquête sur le financement d'un waqf égyptien du XVe siècle: les fongtes de Jawhār al-Lālā," *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 38/3 (1995): 276-278, 301-302; Amīn, *op. cit.*, 72-81; Lev, *op. cit.*, 153-154; Behrens-Abouseif, *op. cit.*, 65. 他に、施設運営費等の慈善的支出と、自身や子孫への利益供与分との分配比率を予め規定する方法もあった。例として、WA, j68; q1018; DW, 16/99.

(22) *Khiṭaṭ*, 4: 764; *Sulūk*, 3: 17.

(23) マムルークによる財産保全手段としてのワクフ制度の利用は、同時代の人々の目にも明らかであった。Ibn Khaldūnは、マムルークによる積極的な宗教施設の建設とワクフ設定の動機が、子孫への利益供与にあったと看破している [*Muqaddima*, 2: 384 (森本訳3: 160-161); *Ta'rif*, 279]。al-Balātunusiも彼らが「自身と子孫のための現世利益の掌握 (hawz al-dunyā)」を真の目的としてワクフを設定していたと見る [*Tahrīr*, 289-290]。Cf. *Inbā' al-Haṣr*, 480.

歴代スルターンはワクフを自身の重要な収入源として位置づけ、他のアミールを遥かに凌駕する大規模なワクフ設定を積極的に推し進めたのである²⁴⁾。

かかるマムルークのワクフにおいて受益対象者となったのは、ワーキフ本人とその子孫に限られなかった。ワクフ文書によれば大多数のケースで、ワーキフの血縁者のみならず彼の解放奴隷（‘utaqā’）も受益対象に指定されているが²⁵⁾、当然そこには自身が養成したマムルーク軍団が含まれていた²⁶⁾。また、ワーキフと個人的に近い関係にあると思われる他のアミールやマムルーク軍人を、実名を挙げて受益対象に指定することも見られた²⁷⁾。またスルターンが、おそらく褒美や恩寵の一環として、臣下のアミール／マムルーク軍人を受益対象としたワクフ設定を行うケースもあった²⁸⁾。これらのワクフを通じて、多くのマムルークが、国家から授与されるイクターや月給とは別個の独立した収入手段を獲得したのである。

Ⅲ 管財人としてのマムルーク

1 利権としての管財人ポスト

以上のようなワクフの発展とともに、ワクフ財の運用権を握る管財人職は利権化し、ウラマーのみならずマムルーク軍人や書記官僚らも巻き込んだ獲得競

24) 拙稿「スルターンの私財とワクフ」参照。なおバルクークも自身が設立したマドラサに対し、必要な分量以上の物件をワクフ設定している [*Khiṭaṭ*, 4: 686]。Petryによれば、カーイトバーイ al-Ashraf Qāyṭbāy (r. 872-901/1468-96) とガウリー Qānṣūh al-Ghawrī (r. 906-22/1501-16) のワクフは、規定されている支出は総収入の7~14%に過ぎず、残りは全て管財人を務める彼ら自身の手に入る、個人的な財源であったという。Petry, *Protectors*, 199-200, 202-203.

25) 解放奴隷とその子孫はワーキフの子孫断絶後の受益対象とされるのが一般的だが、彼らと自身の血縁者の各々に最初から手当を支給することもあった。例えば、DW, 16/99; 23/152.

26) マムルーク朝のアミールはその位階に応じ、奴隷の購入・解放を通じ一定数のマムルーク軍人を養成・維持する義務を負っていた。D. Ayalon, “Studies of the Structure of the Mamluk Army II,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 15/3 (1953): 459-462, 467-471.

27) DW, 16/104; WA, j679.

28) DW, 15/97; 33/203; Awqāf Sultan al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn: 345-356.

争の対象となった。先に見たように、ワクフを設定する場合、その多くが子孫への手当の支給を条件付けていたこともあり、ワーキフは自身の死後の管財人に子孫を指名するのが一般的であった。しかしながら、ワクフ規定は一定の拘束力はあるものの、必ずしも厳守された訳ではなかった。838/1434年には、多くのマドラサやハーンカーにおいて、その運営や官職任命がワクフ設定時に定められた規定を順守していないとして問題視されている⁽²⁹⁾。実際に、規定と一致しなくとも有力者が実力で管財人職を掌握する事例もあった⁽³⁰⁾。このようにワクフ規定と就任者が異なる例は多々見られたが、特に大規模なワクフほど、その管財人職は獲得競争とスルターンによる任免の対象となった⁽³¹⁾。中にはワクフ支出を削減しその余剰分をスルターンへ支払うことを条件に、当該ワクフの管財人に任じられる例も見られた⁽³²⁾。

それとともに、この時代、管財人職獲得のための金銭の授受が広く行われることとなった⁽³³⁾。かかる「売官」の広まりは、それに見合うだけの利益が任官によって得られることを前提に成り立つものといえよう。管財人がワクフから

(29) *Nujūm*, 15: 57-59; *Inbā' al-Ghumr*, 3: 538-539; *Nuzha*, 3: 313-314.

(30) 例えば856/1452年には、ワーキフの条件では秘書長 (kātib al-sirr) が就任するはずのナースイリーヤ廟 (al-Turba al-Nāṣiriya) の管財人職をムフタスイブ (muḥtasib: 市場監督官) が獲得している [*Ḥawādith*², 1: 299; *Izhār*, 1: 206]。

(31) バルスバーイ al-Ashraf Barsbāy (r. 825-42/1422-38) は治世を通じ、エジプトのシャーフィイー派大カーディーが持っていた様々な管財人職を取り上げている [*Sulūk*, 4: 1096-1097; *Nuzha*, 4: 39; *Inbā' al-Ghumr*, 4: 97; *Nayl*, 5: 57]。874/1469年にはイブン・トゥールーン・モスク (Jāmi' Aḥmad b. Ṭūlūn) の管財人職がシャーフィイー派大カーディーから官房次長 (dawādār thānī) の手に移された [*Inbā' al-Ḥaṣr*, 141]。875/1470年にはハナフィイー派とシャーフィイー派の大カーディー同士がある大規模な家族ワクフの管財人職をめぐる争っている [*Inbā' al-Ḥaṣr*, 225]。895/1490年にはダマスカスのマーリダーニーヤ学院 (al-Madrasa al-Māridāniya) の管財人を務めるウラマーが拘束され、その管財人職がエジプトの官房長のものとされた [*Ta'liq*, 941]。他の例として *Ḥawādith*², 1: 172; *Ibn Ḥijr*, 882。

(32) *Izhār*, 1: 127-128.

(33) 管財人職の売官例: *Izhār*, 1: 440; 2: 39, 167-168, 359; *al-Buṣrawī*, 78; *Ta'liq*, 725, 832, 1100。ワクフ関連のポストを他者に譲り渡すことは史料中で nazala/nuzūl と表記される。

手当を受給するスタッフの中で最も高給を得ていたことは間違いないが³⁴⁾、この職の役得はそれにとどまるものではない。ワーキフの財産保有手段として、対象ワクフ施設の運営や公益活動に必要以上の物件がワクフ財に設定されていたことを想起すれば、管財人職に就任することは、ワーキフが生存中に握っていた利権をそのまま引き継ぐことを意味していた。それはワクフ運営権を握る管財人が、かかる潤沢なワクフ収益を自身のために流用し得た可能性を示唆する。例えば798/1396年には、カイロのマンスーリー病院 (al-Bīmāristān al-Manṣūrī) の管財人を務めていたアターベク・クムシュブガー Kumushbughā³⁵⁾が、同病院のワクフ収入を流用していたことが発覚し問題になったが³⁶⁾、他にも管財人交代時に会計監査が行われたり、それにより流用が発覚する事例はしばしば見られた³⁶⁾。管財人がその立場を利用し、ワクフ財それ自体を私物化することも見られ、908/1503年には、時のスルターン・ガウリーがダマスクスのアーディリーヤ学院 (al-Madrasa al-ʿĀdiliya al-Ṣuḡhrā) のワクフとなっているアレppo州の一村を己のものとする目的で、自らその管財人職を獲得している³⁷⁾。またフェルナンデス Fernandesによれば、845年シャーバーン月/1441年12月に設定された厩舎長カラークジャー Qarāqūjā al-Ḥasanī のワクフは、後任の厩舎長が彼の子孫と協力して管財人を務めるよう規定されているが、同職の後任のカーンバーイ Qānbāy (Qānībāy) al-Rammāh³⁸⁾がそのワクフ財をイスティブダールによって獲得していることがワクフ文書に見られるという³⁸⁾。

こうしてワクフ管財人職は富の獲得源として扱われ、ワクフ権益は管財人職を単位として人々の間を移動した。管財人職の権益としての性格を最も端的に

(34) Cf. L. Fernandes “Mamluk Politics and Education: The Evidence from Two Fourteenth Century Waqfiyya,” *Annales Islamologiques* 23 (1987): 90–92.

(35) *Badr*, fol. 191v.

(36) 例として, *Badr*, fol. 187v; *Ḥawāḍith*², 1: 347; *Ibn Ḥijjī*, 131, 179; *Ibn Qāḍī Shuhba*, 1: 565; *al-Buṣrawī*, 135, 217.

(37) *Mufaḥkaha*, 1: 266.

(38) L. Fernandes, “Istibdal: The Game of Exchange and Its Impact on the Urbanization of Mamluk Cairo,” D. Behrens-Abouseif (ed.), *The Cairo Heritage: Essays in Honor of Laila Ali Ibrahim*, Cairo and New York, 2000: 214. この管財人規定は, Awqāf Amir Qarāqjā Amīr Ākhūr: 217–218.

表しているのが、それがスルターンの直轄財源（ザヒーラ *dhakhīra*）に組み込まれている事例である。15世紀後半以降、国家財政の行き詰まりから行財政運営面におけるザヒーラの重要性が高まると、歴代スルターンはイクターその他の土地や香辛料貿易に関する利権等、様々な権益をザヒーラに組み込み、その拡大に努めたが³⁹⁾、ワクフ管財人職もその対象とされた。ここで注目したいのが、901/1495年にスルターン・ムハンマド *al-Nāṣir Muḥammad b. Qāyṭbāy* がカーイトバーイの死去に伴って即位した時の事例である。彼は軍隊の忠誠心を獲得するため、父の時代にザヒーラに編入されていた約一千ものイクターを供出し、彼らに分配したが、この時ザヒーラに入っていたマドラサその他のワクフ管財人職を同時に供出し、配分している⁴⁰⁾。この事例は、管財人職が富の獲得源として、イクターと同列に扱われていたことを象徴するものといえよう。同様に917/1511年までには、かつてダマスカスのシャーフィイー派大カーディーが務めていたヌーリー病院（*al-Bīmāristān al-Nūrī*）の管財人職が、ザヒーラに属するようになっていた⁴¹⁾。また890/1485年、秘書長イブン・ムズヒル *Abū Bakr b. Muzhir* が自身で設定したワクフの管財人職をカーイトバーイに譲り渡している事例は、スルターンへの貢物の一環と考えられている⁴²⁾。管財人職が複数の人物の間で分割されて譲渡・売買されていたことは⁴³⁾、その「財産」としての性格を端的に表していよう。

39) 拙稿「ザヒーラ考：後期マムルーク朝のスルターン財政」『アジア・アフリカ言語文化研究』73（2007）；同「後期マムルーク朝国家と土地制度：イクター制崩壊期の東アラブ世界」博士論文（中央大学）、2006：4章。

40) *al-Badr al-Zāhir*, 51-52; *Badā'i*, 3: 335. cf. 拙稿「ザヒーラ考」145-146.

41) *Ḥawādith al-Zamān*, 2: 218. cf. *Ṣubḥ*, 4: 191.

42) D. Behrens-Abouseif, “Qāyṭbāy’s Investments in the City of Cairo: Waqf and Power,” *Annales Islamologiques* 32 (1998): 31.

43) *Ta’līq*, 241, 427, 535, 600, 601, 725, 832; *Ibn Ḥijjī*, 265, 644, 928, 1015; *Mufaḥkaha*, 1: 30. cf. Miura Toru, “Administrative Networks in the Mamlūk Period: Taxation, Legal Execution, and Bribery,” Sato Tsugitaka (ed.), *Islamic Urbanism in Human History: Political Power and Social Networks*, London and New York, 1997: 69-70.

2 マムルークの管財人職掌握

以上のようなワクフ管財人職の利権化とともに、多くの管財人職がマムルークによって獲得・掌握されることとなった。ただしそれは金銭や権力を利用した「違法行為」としてのみ進んだ訳ではない。一方でワーキフの側も、ワクフ設定時に自身の死後の管財人を規定するにあたり、子孫のみならず国家の有力者、特に高位のマムルークの管財業務への関与を条件付けるようになったのである。イブン・タグリービルディー Ibn Taghrībirdī は、*Ḥawādith* の 849/1445 年の記事で以下のように述べている：

「…我々の時代、多くの人々は、マドラサやリバートや子孫やその他に対してワクフを設定する際には、侍従長 (ḥājib al-ḥujab) や官房長や宦官長 (zimām) [といった高級武官] 以外に管財人職を指定することはなく、決して“ターバンの人 (muta‘ammim : ウラマー)” には指定しないようになった⁽⁴⁴⁾。」

このことは現存する文書からも裏付けられる。子孫がワクフの受益対象者に含まれたこともあり、一般的にワーキフの子孫が後任の管財人に指定されたが、管財業務を彼らのみに任せることは少なく、官房長、侍従長、護衛長 (ra's nawbat al-nuwab) など、百騎長位に属する高位の武官が彼らをサポートする共同管財人に指名された。彼らは子孫が断絶したり、子孫の中に適切な人物がない場合には、単独で管財人を務めることも規定されていた。共同管財人が置かれないワクフでも、通常、子孫断絶後に最終的に管財人を務める者として、高級武官が複数、優先順位とともに指定された⁽⁴⁵⁾。

またマムルークとその縁者の手によるワクフでは、ワーキフの解放奴隷＝マ

⁽⁴⁴⁾ *Ḥawādith*², 1: 83-84.

⁽⁴⁵⁾ *Amīn, op. cit.*, 116-117. なお、現存するマムルーク朝期のワクフ文書、特にその大部分を占める軍人とその縁者（妻子・兄弟姉妹・子孫等）によって設定されたワクフ文書を見る限り、管財人規定中に軍人・武官への言及がないものはほとんどない。一方で一部の官僚や商人の手によるワクフ文書には、軍人の管財人就任規定が見られないものもあり、社会集団・階層とワクフ規定の傾向との関連についてはさらなる検討の余地がある。

ムルークを子孫に次ぐ、もしくは共同の管財人とすることが広く見られた。それに加え、おそらくワーキフに近い存在であった特定の軍人を、個人名を挙げて（単独にせよ共同にせよ）管財人に指定するケースも多い⁽⁴⁶⁾。実際、876/1472年にかつての秘書長バーリズィーNāṣir al-Dīn al-Bārīzīの娘であり、ジャクマクの妃であったムグルKhwand Mughulが死去した際には、彼女が建設したマドラサその他に対するワクフの管財人職が、彼女の父と兄弟（秘書長Kamāl al-Dīn al-Bārīzī）のワクフとともに彼女の娘婿のアターベク・ウズベクUzbek min Ṭuṭukhに任されている⁽⁴⁷⁾。特に高位の武官が設定したワクフの場合には、彼と同じ官職の後任を管財人とする規定が多く見られた。例えば845/1441年当時の厩舎長カラークジャーと、871/1467年当時の厩舎長タグリービルディーTaghrībīrdī al-Aḥmadīが各々設定したワクフでは、いずれも共同管財人や将来の管財人が厩舎長就任者となるよう規定されている⁽⁴⁸⁾。一方で低位の武官が設定したワクフでは、その上役にあたる武官を管財人に指定する例もあった⁽⁴⁹⁾。また、有力アミールのマムルークや、その私的スタッフとして仕えた人物のワクフでは、自身の主人を死後の管財人に指定した。エジプトの官房長ユヌスYūnus al-Dawādārの私的な官房長であったヤシュバクYashbak al-Maḥmūdīのワクフでは、自身の死後の管財人を主人のユヌスとし、その死後にワーキフ自身の子孫を、子孫の断絶後には彼と同じくエジプトの官房長の下で私的な官房長を務める者を管財人に指定している⁽⁵⁰⁾。これらのマムルーク軍人の管財人職就任を子孫に優先させる規定も見られ、中にはワーキフの次の管財人として時

(46) Cf. WA, q1020r (1 Shawwāl 910); q1143 mukarrar; j450r (1 Rabīʿ al-Awwal 879); DW, 12/75; 16/104r (2 Jumādā al-Ākhira 848); 18/117; 23/152; 26/169; Awqāf Yaḥyā b. Ṭūghān: 45-46.

(47) *Inbāʾ al-Ḥaṣr*, 426-427, 464-465.

(48) Awqāf Amir Qarāqjā Amīr Ākhūr: 217-218; DW, 23/152. 同様の官房長の例として、DW, 38/241r (19 Shawwāl 908).

(49) 例えば、武器庫監督官 (shādd al-silāḥkhānāh) のJānimのワクフでは、彼の解放奴隷と子孫の断絶後の管財人を、同職の上役にあたる武具長 (amīr silāḥ) 就任者に、次いで自身の後任の武器庫監督官に指定している [DW, 20/80]。

(50) DW, 20/121.

のスルターンを指名することもあった⁵¹⁾。

さて、地位や影響力でワーキフの子孫を凌駕する軍人の共同管財人が、管財業務のイニシアチブを握っていたことは容易に想定されよう。その上、この時代の高い死亡率や頻繁な権力の交代に伴う有力家系や政治集団の消長、マムルークの子孫が支配層から除外されるというマムルーク朝独特の統治理念により、多くのワクフが（それが真実家系の断絶によるにせよ、適切な人物の不在という理由によるにせよ）共同もしくは子孫後の管財人に指定された武官の監督下に入ったことは疑い無い。事実、スルターンのワクフですら子孫が管財人職を継承していくことは稀であった⁵²⁾。またワクフ設定時の規定にはなくとも、スルターンによる任命を契機として、特定の武官職に特定のワクフの管財人職が与えられることが慣習化することもあった⁵³⁾。その結果、多くのワクフ管財人職が特定の武官職と結び付くこととなった。年代記と行政便覧史料から、特定の武官職就任者が管財人を務めることが慣習化していたエジプトのワクフ施設をまとめたのが（図表）である。一見して明らかなように、アターベクや官房長などの高級武官が、エジプトを代表する古くからの主要な宗教施設や、スルターンや有力アミールによって建設された巨大な施設のワクフ管財人を複数同時に務めていた。これらの高級武官は、官職就任時に「その職と関係する諸管財人職の賜衣 (khil'a)」を同時に下賜され⁵⁴⁾、それを着て城塞からパレードで

51) 例として、DW, 26/169; 31/198r (21 Ramaḍān 890); WA, q882: 446.

52) 拙稿「スルターンの私財とワクフ」32-35; 同博士論文, 122. イーナール al-Ashraf Īnāl (r. 857-65/1453-60) と息子アフマド al-Mu'ayyad Aḥmad (r. 865/1460-1) のワクフが当初後者の廃位により没収されたものの、アフマドの従姉妹を妻としたカーイトバーイの治世以降はアフマドとその子孫が管財人を務めたように (L. Reinfandt, "Religious Endowments and Succession to Rule: The Career of a Sultan's Son in the Fifteenth Century," *Mamlūk Studies Review* 6 (2002): 60-61), 子孫が存命の場合でもワクフ管理権が彼らの手に留まるか否かは有力者とのコネクションやその時々政治状況に応じたといえる。

53) 例えばバルクーク建設のザーヒリーヤ学院 (al-Madrasa al-Zāhirīya) の管財人職は、文書で規定される優先順位では4番目にあたる厩舎長が務めることが慣習として確立した (拙稿「スルターンの私財とワクフ」34-35)。

54) *Nujūm*, 16: 34, 64, 260, 381; *Ḥawādith*¹, 684; *Ḥawādith*², 1: 346, 363; *Tibr*, 122, 256, 425; *Iẓhār*, 1: 320, 344; *Rawḍ*, fols. 162r, 206v; *Inbā' al-Ḥaṣr*, 27.

監督下の施設へ入ることが慣習となった⁵⁵⁾。これらの管財人職は、時にスルターンにより奪われ、他の人物に与えられることもあったものの、基本的にはその武官職への就任者が自動的に獲得する、官職付属の利権となったといえよう。こうした管財人職と特定武官職との結びつきが叙述史料から確認できるのは、百騎長のポストが5つ（アターベク、官房長、厩舎長、護衛長、侍従長）、四十騎長のポストが1つ（官房次長）に過ぎないが、これらよりも上位や同等の武官職（武具長、会議長（amīr majlis）など）も同様に他のワクフの管財人職を握っていたことは容易に想定できよう。実際にワクフ文書では、様々な官職が管財人に指定されている⁵⁶⁾。またダマスクスにおいても、州総督がヌーリー病院とウマイヤ・モスクの管財人を、同地の官房長がヤルブガー・モスク（Jāmī Yalbughā）の管財人を務めることとなっていた⁵⁷⁾。マムルーク朝の武官職は政権内部における序列を示すとともに、それに比例した規模のイクターを伴っていたが、この時代はそれに加え、多数の管財人職を利権として集積していたといえる。換言すれば、マムルークはかかる国家官職の獲得を通じ、政治的地位とイクターという経済基盤を獲得したのみならず、豊富なワクフ財管理に伴う利得から得られる経済力、施設の運営と慈善事業の実施を通じて得られる社会的威信、それらを背景とした政治的社会的影響力をも獲得したのである。彼らは管財人の地位を得る一方、実務は代理に任せることにより、軍人には難しいと思われる管財業務の遂行とその複数兼務を可能としたのである⁵⁸⁾。

55) *Rawḍ*, fols.5v, 206v; *Badā'i*, 4: 75; *Izhār*, 2: 389-390; *Iqd*²: 130-131, 164-165; *Nuzha*, 2: 499, 519-520.

56) 例えばZayn al-Dīn Yahyā al-Ustādārのワクフ文書では、自身の死後は子孫と厩舎長・軍務庁長官(nāzir al-jaysh)・マーリク派大カーディーという武官・書記官僚・法官の高官三者が協力して管財人職を務め、別にハーッス庁長官(nāzir al-khāṣṣ)と金庫係(amīr al-khāzindār)が子孫断絶後ワクフ収支の監査役を務めることが条件付けられている[DW, 17/110]。

57) *Ṣubḥ*, 4: 184, 191; *Ta'liq*, 1285.

58) 例えば885/1480年、官房長の私的な金庫係(khāzindār)が主人の持つ管財人の職務を代行している[*Wajiz*, 906-907]。897/1492年には、ダマスクス総督が務めるウマイヤ・モスクの管財人職の代理を、彼のマムルークが務めていた[*Ta'liq*, 1134]。902/1497年にわずか1才のダマスクス総督の息子がワクフ管財人に据えられていることは、実務能力が問題ではないことを如実に表している[*al-Buṣrawī*, 209]。その他の事例として、*Ibn Hijr*, 425.

図表：軍人職とワクフ管財人職の結び付き一覧¹⁾

官職	施設	建設年	建設者	<i>Khīṭaṭ</i> 頁	年代記典拠	行政便覧 ²⁾	文書規定 ³⁾	備考
アターベク (atābak al-‘asākīr)	al-Bīmāristān al-Manṣūrī ¹⁾	683/1284	Sultan al-Manṣūr Qalāwūn	4:692-702	<i>Sulūk</i> , 3:43; <i>‘Iqd</i> ² , 149, 164; <i>Nuzha</i> , 2:510, 519; <i>Ḥawādith</i> ¹ , 318; <i>Ḥawādith</i> ² , 1:87; <i>Izhār</i> , 2:389; <i>Rawḍ</i> , 5v, 162r; <i>Badā’i</i> , 4:75; <i>Nujūm</i> , 15:40-41, 65.	S, 4:184; D, fol. 124r; H, 114.	× ⁵⁾	S, 4:38 では「エ ジプトで最も偉大 なアミール」が就 任するとされる。
	Khānqāh Sa‘īd al-Su‘adā’	569/1173-4	Sultan Ṣalāh al-Dīn Yūsuf al-Ayyūbī	4:727-32		D, fol. 124r		Dによれば時々務 めたとされる。
官房長 (dawādār kabīr)	al-Madrasa al-Mu‘ayyadiya al-Jāmi‘ al-Mu‘ayyadi bi-al-Jīza	818/1415	Sultan al-Mu‘ayyad Shaykh	4:334-47	<i>Inbā’ al-Ghumr</i> , 3:240; <i>‘Iqd</i> ² , 130, 164-165; <i>Tibr</i> , 122, 256; <i>Nuzha</i> , 2:499, 520; <i>Rawḍ</i> , 175v.	D, fol. 125r; H, 117.	○ ⁶⁾	秘書長 (kātib al- sirr) と共同。
	al-Jāmi‘ (al-Madrasa) al-Ashrafi bi-al-Qāhira al-Jāmi‘ (al-Khānqāh) al-Ashrafi bi-al-Ṣaḥrā’	827/1424 835/1433	Sultan al-Ashraf Barsbāy	4:348	<i>Tibr</i> , 122; <i>Rawḍ</i> , 175v.	H, 117.	○ ⁷⁾	秘書長と共同。
	al-Jāmi‘ al-Ḥakīmī	403/1013	Caliph al-Ḥakīm bi-Amr Allāh	4:107-26	<i>Sulūk</i> , 4:1223; <i>Nayl</i> . 5:134.			844/1441 年に シ ャーフィー派大 カーディーから移 管。一時的？
	Khānqāh Sa‘īd al-Su‘adā’	569/1173-4	Sultan Ṣalāh al-Dīn Yūsuf al-Ayyūbī	4:727-32	<i>Rawḍ</i> , 164v; <i>Wajīz</i> , 906-7, 1265-6.			
	al-Khānqāh al-Nāṣiriyya bi-Siryāqūs	725/1325	Sultan al-Nāṣir Muhammad b. Qalāwūn	4:767-70	<i>Rawḍ</i> , 164v.		× ⁸⁾	
	al-Khānqāh al-Baybarsīya	709/1310	Sultan al-Muẓaffar Baybars	4:732-40	<i>Wajīz</i> , 906-7, 1265-6.			
	Qubbat al-Ṣāliḥ (al-Madrasa al-Ṣālihiyya)	648/1250 (641/1243) ⁹⁾	Sultan al-Ṣāliḥ Najm al-Dīn Ayyūb al- Ayyūbī	4:485-94	<i>Rawḍ</i> , 164v; <i>Wajīz</i> , 906-7, 1265-6.			

(続き)	al-Aḥbās ¹⁰⁾				<i>Tibr</i> , 122.	D, fol. 132r-v; H, 117; S, 4:38.		Dによれば、エジプト総督(nā'ib al-saltana)の弱体化とともに管轄するようになった。
厩舎長 (amīr ākhūr kabīr)	al-Madrasa al-Ẓāhiriya al-Barqūqiya	788/1386	Sultan al-Ẓāhir Barqūq	4:679-89	<i>Inbā' al-Ghumr</i> , 3:240; <i>'Iqd</i> ² , 130-1, 164; <i>Nuzha</i> , 2:499, 510, 519; <i>Tibr</i> , 256; <i>Rawḍ</i> , 176v.	D, fol. 124v; H, 116.	△ ¹¹⁾	ワクフ条件では四番目。秘書長と共同?
	al-Madrasa al-Qānbā'iya	816/1414	Amir Qānbāy Amīr Ākhūr	4:670	<i>Rawḍ</i> , 176v.	D, fol. 124v; H, 116.	○ ¹²⁾	Hではal-Ātibāqiyaと誤読されている。
	Khānqāh Qawṣūn	736/1335-6	Amir Qawṣūn	4:318, 778		D, fol. 124v; H, 116.		Hではal-Qawmūniyaと誤読されている。
護衛長 (ra's nawbat al-nuwab)	al-Khānqāh al-Shaykhūniya	756/1355	Amir Shaykhū(n) al-Nāṣirī Atābak al-'Asākir	4:760-4	<i>Inbā' al-Ghumr</i> , 3:240; <i>'Iqd</i> ² , 164; <i>Nuzha</i> , 2:519-20; <i>Izhār</i> , 3:232-3; <i>Rawḍ</i> , 5v, 206v.	D, fol. 126r; H, 118.		
	al-Madrasa al-Ṣarghitmishiya	757/1356	Amir Ṣarghitmish Ra's Nawba	4:647-54	<i>'Iqd</i> ² , 164; <i>Nuzha</i> , 2:519-20; <i>Rawḍ</i> , 5v.	D, fol. 126r; H, 118.	× ¹³⁾	
	al-Madrasa al-Hijāziya	761/1360	Khwand Tatar al-Hijāziya bint al-Malik al-Nāṣir b. Qalāwūn	4:531-4		D, fol. 126r; H, 118.		
	al-Jāmi' al-Akhḍar	(769/1368) ¹⁴⁾	Amir Maliktamur al-Shaykhūnī	4:308		D, fol. 126r; H, 118.		
侍従長 (ḥājib al-ḥujjāb)	Jāmi' 'Amr b. al-'Āṣ	21/641-2	Amir 'Amr b. al-'Āṣ	4:8-55	<i>'Iqd</i> ² , 165; <i>Inbā' al-Ghumr</i> , 3:240; <i>Nuzha</i> , 2:510, 520.	D, fol. 126r.		848-57/1444-53年は他者の手にあった。 <i>Tibr</i> , 91-2; <i>Izhār</i> , 1:361.
	Jāmi' al-Aẓhar	361/972	Caliph al-Mu'izz bi-Dīn Allāh	4:90-107	<i>'Iqd</i> ² , 165; <i>Inbā' al-Ghumr</i> , 3:240; <i>Nuzha</i> , 2:510, 520.	D, fol. 126r.	○ ¹⁵⁾	848-57/1444-53年は官房次長・官房長を歴任したDawlatbāyが務めた。 <i>Tibr</i> , 91-2; <i>Izhār</i> , 1:141, 344; <i>Nuzha</i> , 4:303.

(続き)	Madrasat Uljāy	774/1373 ¹⁶⁾	Amir Uljāy Atābak al-'Asākīr	4:615-6	<i>'Iqd</i> ² , 165; <i>Nuzha</i> , 2:510, 520.		
	al-Ṣundūq ¹⁷⁾					D, fol. 126r; H, 119.	850/1446-7年廃止
官房次長 (dawādār thānī)	Madrasat (Jāmi') al-Malik al-Nāṣir Ḥasan	760/ 1359-60	Sultan al-Nāṣir Ḥasan	4:269-81	<i>Rawḍ</i> , 206v.		× ¹⁸⁾

- 1) ワクフ財政再建などの理由で一時的に軍人に任されたものではなく、これらの職に就いた人物が管財人を務めることが慣習化していたワクフのみを表にした。
- 2) S: *Ṣubḥ*/D: *Dīwān al Inshā'*/H: *Hadā'iq*
- 3) 子孫や解放奴隷による管財人職就任が不可能な場合に、当該官職の管財人就任が文書で規定されているか否かを示す。
- 4) なおスルターン al-Ashraf Sha'bān が 777 年ジュマードーⅡ月3日付でメッカに対して設定したワクフの管財人職は、彼の子孫の断絶後はマンスーリー病院の管財人が務めることが規定されている。[Awqāf Sultan al-Ashraf Sha'bān: 257]
- 5) 子孫・解放奴隷の後はシャーフィイー派大カーディーの就任を規定。[*Khiṭaṭ*, 4: 696; Awqāf Sultan Qalāwūn: 369.]
- 6) 子孫と官房長と秘書長が協力し、子孫の断絶後は後二者のみ。[Awqāf Sultan Shaykh: 154.]
- 7) Awqāf Sultan Barsbāy: 7, 33, 47.
- 8) 文書では本人の後はスルターン、彼が実権を有しない場合はエジプト総督が管財人を務めるように規定されている。[Awqāf Sultan al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn: 417, 446.]
- 9) 括弧内はマドラサの建設年。
- 10) 宗教施設や慈善行為の財源として国有地を割り当てられた慈善リザク (al-rīzaq al-aḥbāsīya)。
- 11) 就任順位はラース・ナウバ (ra's nawbat al-umarā' al-jamdāriya al-kabīr), 会議長 (amīr majlis), 官房長に次ぐ四番目。秘書長とマドラサのシャイフが協力。[DW, 9/51v.]
- 12) *Inbā' al-Ghumr*, 3: 458.
- 13) ラース・ナウバ (ra's nawbat al-umarā' al-jamdāriya al-sultāniya al-kabīr) が本人死後の管財人就任順位一位に指定されるが [WA, q3195: 38-39], これは護衛長とは別の職である。
- 14) 正式な設立年は不明。この年に設立者が百騎長に任じられた時には既に建設済みであったようである。[*Badā'i*, 1 (2): 71]
- 15) *Izhār*, 1: 344.
- 16) al-Maqrizi は設立年を 768/1366-7 年とするが、現存するマドラサの入り口の碑文にはこの年号が記されており、こちらが正しいと思われる。[*Khiṭaṭ*, 4: 616, note 1]
- 17) 預言者の後裔や老齢の兵士、ウラマーらに手当を施すための慈善基金。[*Taysīr*, 73]
- 18) 文書の規定では子孫→解放奴隷。侍従長以下の地位の場合侍従長が協力→侍従長→ラース・ナウバ→スルターンの順。[Awqāf Sultan al-Nāṣir Ḥasan: 175-176]

それでは、このような軍人によるワクフ管財人職の掌握が広まったことには、いかなる理由があるのだろうか。前述のイブン・タグリービルディーは、ワーキフが進んで高級武官を管財人に指定するようになった理由を、ウラマーがその職務の適正な遂行に無関心であるためとしているが⁽⁵⁹⁾、ワクフ運営上の現実的必要性についても考慮する必要があるだろう。例えばバルクークのワクフの場合、管財人以下賃料徴収人 (shādd) と書記 (kātib) 各々一名、公証人 (shāhid) 二名の計五名、より巨大なカーイトバーイのワクフでは計七名がワクフ運営のための専従スタッフとして置かれていた⁽⁶⁰⁾。しかしワクフ文書によれば、これはあくまで一部の巨大なワクフに限られており、多くのワクフでは管財人以外の運営スタッフはほとんど置かれていない。それに加え、頻繁な遊牧民反乱や在地勢力の台頭が見られ、しばしば政府の徴税業務すら滞ったこの時代の地方情勢を考えれば⁽⁶¹⁾、彼らのみでエジプト・シリアの各地方に散財するワクフ財源から定期的に賃料を取立てることは現実的に非常に困難であったと考えられる。以上に鑑みれば、イクター運営のための自前のディーワーンとスタッフを抱え、また賃料取立の強制力も備えた軍人が管財人を務めることで、ワクフの円滑な運営が可能になるという側面もあったのではないだろうか。実際にジャクマク al-Zāhir Jaqmaq (r. 842-57/1438-53) の即位前、彼が保有するイクターと諸管財人職とその他の収入源 (jihāt) は彼の下僚によって一括して管理運営されていた⁽⁶²⁾。またそれ以上に、これらの軍人の力によるワクフの保護が期待されたという理由があった。これは先に述べた管財人によるワクフの流用と一見矛盾するが、ワクフ財の賃貸借と深く関わってくる問題であり、次章で改めて論じることとする。

(59) *Hawādith*², 1: 84. Abū Ḥāmid al-Qudsī も信頼性 (amāna) をマムルークの徳の一つに挙げ、ワクフや孤児財産の管理を任されてもそれを荒廃させたり流用することは少ないと述べる [*Duwal al-Islām*, 109-110]。その真偽はともかく、彼らがしばしばかかる役目を担ったことを示している。

(60) DW, 9/51 (Sultan Barqūq); WA, q886 (Sultan Qāyibāy): 141-145.

(61) Cf. Petry, *Protectors*, 108-113; M. A. Muṣṭafā, *Ṣa'īd Miṣr fī 'Ahd al-Mamālīk al-Charākisa (784-922/1382-1517)*, Cairo, 2004: 51-70.

(62) *Nuzha*, 4: 179.

Ⅳ ワクフ財賃借人としてのマムルーク

1 土地賃貸借の広まり

この時代のマムルークにとっての重要な私的収入源として、「賃借地 (musta'jarāt)」の存在が挙げられる。14世紀後半より、本来政府が直接官吏を派遣し、徴税を行うこととなっていた政府直轄地を、有力アミールが賃借することが急速に広まった。かかる政府直轄地の賃借は、政府の取り分である一定地域の徴税権を、それに相応しい額を貸主＝財務官庁に予め支払うことによって一定期間譲り受けるという意味で、一種の「徴税請負」であったと言え、支払った賃料と実際の税収分との差額が彼らの利益となった⁶³⁾。そして彼らはしばしばその実収入をはるかに下回る額を前払いし、事実上その土地を占有したことから、国有地の流出と国家の財政難を引き起こしたのである⁶⁴⁾。

ただし、賃借の対象とされた土地は政府直轄地に限られなかった。それ以上に「賃借」という形態による土地保有の拡大を促したのが、この時代のワクフ地の増加である。ワクフ財源に設定された物件はそもそも賃貸に出すことを前提としており、そこから得られる賃料がワクフの収益とされた。すなわち、ワクフ地の増加は、賃貸借を通じて運営される農地が拡大したことを意味していたのである。ワクフ文書には物件の賃貸借に関する規定が細かく定められており、農地の場合、実際に耕作する農民に1～3年という短期間の契約で賃貸することが本来想定されていた⁶⁵⁾。しかしチェルケス時代初期より、マムルークがかかるワクフ地の賃借に積極的に参画するようになった。マクリーズィーは以下のように述べる：

「…そして彼（バルクーク）が玉座についたとき（784/1382）、彼のアミー

⁶³⁾ al-Nuwayrīもシリアの「徴税請負地 (mafšūla, muḍammana)」とエジプトの賃借地を同類のものと捉えている [Nihāya, 8: 260-261; I. 'A. Ṭurkhān, *Al-Nuẓum al-Iqtā'īya fī al-Sharq al-Awsaṭ fī al-'Uṣūr al-Wuṣṭā*, Cairo, 1968: 241].

⁶⁴⁾ 拙稿「ムフラド序の設立と展開」4-6; 同博士論文, 101-102, 146-147. cf. *Sulūk*, 4: 295.

⁶⁵⁾ Amīn, *op. cit.*, 282-283.

ルたちはワクフ財源 (jihāt al-awqāf) であるこれらの地区 (nawāḥi⁶⁶⁾ を賃借し、それを彼らが賃借した [額] よりも高い [賃料で] 農民 (fallāḥūn) に賃貸するようになった。そしてバルクーク (al-Ẓāhir) が死去すると、このことは途方もなく [広まり]、国家の人々 (ahl al-dawla) がエジプト・シリアの全てのワクフ地を占有 (istawlā) した。彼らの内の最も善良な者は、その収入の権利者に彼の収入となったものの十分の一ほど支払うが、そうでない彼らの内の多くは全く何も払わないようになった。特にこのことはシリア地方で起こった。こうしてそれ (ワクフ) は荒廃し、奪われた。このため、806年 (1403-04年) 以後に起こったこの不幸な状況の中にある最悪な人々は法学者たち (fuqahā') であった。それは彼等に対して設定されたワクフの荒廃と売却と国家の人々によるそれらの土地の占有が原因である⁶⁷⁾。」

彼によれば、アミールによるかかるワクフ地の賃借は、国有地のワクフ化の進行がイクター制と国庫の損害になっているとして、その解消を目論んで開催された780/1379年の諮問会議が失敗に終わった後、行われるようになったとされる⁶⁸⁾。ワクフ地の増加がイクター地の縮小をもたらすという当時の状況にあった、アミールたちはその経済的弱体化を補完すべく、新たな収入獲得手段として、ワクフ地の賃借に本格的に乗り出すようになったと見なせよう。そして彼らは政府直轄地の場合と同様、その地位や権力を利用してそれに相応しい賃料を払うことなく、一方でその土地を農民に転貸することによって差益を獲得した。例えば豊富な蓄財で知られるジャウハル・アルクヌクバーイー Jawhar al-Qunuqbā'ī (d. 844/1440) は、数多くのワクフを低額で賃借し、例えば100dn以上の収入がある村落をその半額以下で賃借していたという⁶⁹⁾。また845/1441-2年に毎年20,000dnの上納金支払を条件に任命されたある地方長官は、

(66) 単数形nāhiya。エジプトの行政村に当たる。農地面積や収穫高('ibra)はこの地区単位に把握された。

(67) *Khīṭat*, 4: 178.

(68) この会議については、拙稿「ムフラド序の設立と展開」6-8; 同「『国有地ワクフ』をめぐるイスラーム法上の議論」030-032.

(69) *Daw'*, 3: 83-84; *Inbā' al-Ghumr*, 4: 169.

管轄領域下のワクフ地を低額で賃借し、その支払に回していたという⁷⁰⁾。また 857/1453年、ジャーニバク Jānībak al-Ustādār は預言者の後裔 (ashraf) へのワクフとされているある村を年間20万ディルハム (dh) を支払う契約で賃借し、そこから100万dhもの収入を得ていたという⁷¹⁾。またそれとは逆に、大カーディーが有力者への「賄賂」として、自己の監督下にあるワクフを彼らに低額で賃貸することも見られた⁷²⁾。実際のワクフ文書に「権力者 (arbāb al-shawka/dhū al-shawka)」や「農民以外の人物」への賃貸禁止の条件がしばしば設定されていることは⁷³⁾、何よりもそれが実際に広く見られたことを示唆している。かかるワクフ財の賃借はスルターンも行った⁷⁴⁾、有力者共通の手法であった。

かかる低額賃借は、ワクフ収入の減少をもたらすだけでなく、ワクフ財の私有化・流出のきっかけとなることもあり、ワクフ運営上重大な問題であった。すなわち、14世紀末からイスティブダールが普及し、一度ワクフに設定された物件であってもこの手法によって「合法的に」獲得され、流出するようになった⁷⁵⁾。サハーウィー al-Sakhāwī は850/1446年の記事において、「カイロでは私有財が何度もワクフとなり、ワクフが何度も私有財となることが繰り返された」と述べる⁷⁶⁾。実際に876/1471年、サイフィーヤ学院 (al-Madrasa al-Sayfiya) のワクフ財が賃借の後イスティブダールされ、賃借人の私有財とされた上で別のワ

⁷⁰⁾ *Izhār*, 2: 152.

⁷¹⁾ *Izhār*, 1: 306-307, 309.

⁷²⁾ *Inbā' al-Ghumr*, 3: 118-119. cf. Amīn, *op. cit.*, 363. 842/1438年にはスルターンがシャーフィイー派大カーディーに対し、「地位 (jah) を持つ者」にワクフを賃貸することがないように念を押している [*Sulūk*, 4: 1097]。

⁷³⁾ *Awqāf Sultan Barsbāy*: 6; Amīr Yūsuf al-Ustādār: 198; Amīr Qaraqjā Amīr Ākhūr: 219; DW, 11/66; 16/105r (25 Sha'bān 849); WA, j140r (19 Rabī' al-Awwal 817). Amīn, *op. cit.*, 282.

⁷⁴⁾ 例えばスルターン・シャイフ al-Mu'ayyad Shaykh (r. 815-24/1412-21) の事例: *Sulūk*, 4: 469.

⁷⁵⁾ *Khitāt*, 4: 177-178. 具体的事例として, *Hawādith al-Zamān*, 2: 163. またイスティブダールの判決を出すことで有名なカーディーたちがしばしば名指しされている [*Inbā' al-Ghumr*, 2: 196; *Izhār*, 3: 369; *Nayl*, 7: 238]。実際にワクフ文書に、ワクフ財物件のイスティブダールを禁止する条件が設定されていることは [WA, q901: 149-150; j450r (1 Rabī' al-Awwal 879); Amīn, *op. cit.*, 82-83], それがワクフ財獲得の手段として利用され、ワーキフがそれを恐れていたことを示している。

⁷⁶⁾ *Tibr*, 164.

クフに設定されたことが問題となった⁷⁷⁾。アサディー-al-Asadīが、「[ワクフ設定から] 時が流れ、ある人々から [ワクフ財に対する] 欲望が生じ、管財人が義務づけられているそれらの [ワクフ財] 物件 (amākin) の公益 (maṣāliḥ) を成しそれを押し進める力を失った場合、あるいは彼の無能力や資金不足によってその維持管理 (‘imāra) が困難となったり、あるいは彼の威信 (wajāha) と地位 (jah) を弱めた場合には、それ (ワクフ財物件) を権力 (shawka) と武勇 (basāla) と地位 (jah) を持つ人物に適切な賃料なくして賃貸することを強られる。(中略) そして彼 (賃借人) はそれを手にし続けることを欲することとなり、しばしばそれがワクフの財源 (jīha) から彼のもとに移行し続けることとなる」と述べるように⁷⁸⁾、適切な賃料の取立やワクフ財の占有・流出の防止において、借手と貸主の間の力関係が重要な意味を持ったことを考えれば、ワクフ財を賃貸に出す当事者であった管財人を、前述のように高位の軍人に任せることの意義が見えてくる。すなわち、ワクフ財の賃借人がマムルークによって占められる中で、彼らから賃料を取立て、その占有を防ぎ、ワクフを継続させるためには、それ以上の力を持つ有力者の保護が必要不可欠であったといえる。管財人自身による流用の危険があるにも関わらず、ワーキフが進んで高級武官の管財人職就任や管財業務への協力を条件付けた背景には、その危険性を考慮に入れてもなお、ワクフの維持のためには彼らの後楯が必要不可欠であったという当時のワクフを取り巻く状況があったといえよう。

2 土地賃貸借拡大の意味

さて、14世紀後半を境に拡大の一途を辿った農地のワクフ化は、15世紀半ば以降の国有地売却の飛躍的増加によりさらに進行の度合いを深めた⁷⁹⁾。このよ

⁷⁷⁾ *Inbā’ al-Ḥaṣr*, 383-387. その他のワクフ占有例として、*Ibn Ḥijjī*, 406; *Ibn Qāḍī Shuhba*, 4: 83, 260; *Inbā’ al-Ghumr*, 2: 200. cf. M. Ḥ. Ismā’īl “Idārat al-Awqāf fī al-‘Aṣr al-Mamlūkī,” Sylvie Denoix, Jean-Charles Depaule and Michel Tuchscherer (eds.), *Le Khan al-Khalili: Un centre commercial et artisanal au Caire du XIIIe siècle*, vol. 1, Cairo, 1999.

⁷⁸⁾ *Taysīr*, 82-83.

⁷⁹⁾ Abū Ghāzī, *op. cit.*, 26-28, 104-107.

うに賃貸に出すことを前提とするワクフ地が拡大したことは、イクター制を通じた軍人による農村支配の枠外で、様々な社会集団が国家の関与なく土地経営にアクセスする道が広く開かれたことを意味している。政府直轄地の賃借が専らであった時期にはアミールが借手の中心であったようだが、その後次第に有力な書記官僚やウラマーも、政府直轄地であれワクフ地であれ、賃借を通じて土地の経営に乗り出すようになった⁽⁸⁰⁾。また本来の想定通り農民が土地を賃借し、耕作した場合もあったし⁽⁸¹⁾、スーフィーが賃借人であるような事例も見られた⁽⁸²⁾。これらのことは、イクター制を基本とした従来の土地所有形態を変貌させるとともに、イクター保有をその権力の源泉としていたマムルークの社会的影響力の減退につながる恐れを秘めていたといえよう。

ただし、かかる賃借人の多様化の中にあっても、規模の点では前記のマクリズイーの述べる通り、大規模な賃借を可能にするだけの財力の裏付けのあるマムルーク、その中でも特に高位のアミールたちが最大の借手であった。それはイクター制の衰退の中で、彼らが自らの経済基盤と社会的影響力を維持すべく、イクターとは異なった形で土地保有に努めた結果と見ることができよう。しかし、マムルークによる土地の賃借が進んだ背景には、このような借手側の都合だけではなく、貸主側の要望もあったことを見落としてはならない。国家の地方行政掌握力の低下が見られた当時の社会状況を考えれば、政府直轄地であれワクフ地であれ、現地から直接徴税／賃料取立を行うことは高いコストを伴う業務であり、特にそもそもわずかな財務スタッフしか抱えていなかったワクフでは現実的に困難であったことは既に述べた。ワクフの場合、先に見たように管財人職自体を有力者に委託することが一つの対応策であったが、一方で、直轄地にせよワクフにせよ、賃借人から前払いで賃料を徴収し、現地で

(80) 例として、*‘Iqd*¹, 194-195; *Sulūk*, 4: 685; *Ḥawādith*¹, 318; *Inbā’ al-Ḥaṣr*, 447-448.

(81) 857/1453年、エジプトのシャーフィイー派大カーディー‘*Alam al-Dīn al-Bulqīnī*は、農民たちに土地を賃貸するためal-Jizīya県のal-Munāwāt地区へ赴いているが、これは彼の監督下にあったワクフの賃貸借契約のためと考えられる [*Iḡhār*, 1: 398]。

(82) *Inbā’ al-Ghumr*, 2: 533; *Iḡhār*, 2: 153. ただしその土地がワクフであったかは定かでない。

の実際の徴税／賃料取立業務は賃借人に全面的に任せる手法が、（賃借人からの適切な額の支払が保証される限りにおいては）安定的な収入を確保する上で有効な手段であったことは間違いない。そして有力者にワクフ財を賃貸することにより、管財人に有力者を据える必要性は益々増加した。このようにして、貸主と借手双方にとってのメリットが土地賃貸借の広まりを促進させるとともに、ワクフの管財人と賃借人のいずれもが有力マムルーク・アミールによって占められることとなったのである。

さて、賃借人としてワクフ地をも支配下に入れたマムルークであるが、彼らは転貸による差益の獲得のみを念頭に置いた「不労所得者」に過ぎず、当該の農村とは全く関わりを持たなかったのであろうか。史料からは、少なくとも一部の有力アミールが、ワクフ地の賃貸借などを通じて積極的な農地経営に努める様子が窺える。877/1472年、百騎長ハーイルベク Khayrbak al-Ḥadīd al-Ashrafiは、ファイユーム地方の土地を購入するとともにワクフ地を賃借し、耕作・植樹に努めるとともに、そこにモスクや住宅、商店、橋、水路を建設した。そして多くの耕作者（muzāriʿūn）、農民（fallāḥūn）、借地人（mustaʿjirūn）をその地に移住させて耕作させるとともに、彼らに金を貸し付け、それを支援したという⁸³⁾。この記事からは、彼が私有地の獲得と近隣の土地の賃借を通じ、一円的な「土地所有」を実現し、その経営に努めていた様子が窺える。土地の賃貸借は、イクター制衰退の時代において、マムルークによる農村支配の弱体化を補完し、それを維持するための重要な手立てを提供したといえよう。

V お わ り に

12世紀の「国有地ワクフ」の誕生以来、軍事的支配体制の枠外で着実に拡大・発展を続けたワクフは、14世紀後半を境にその規模が一定の臨界点を越え、その存在と役割が国家と社会の全体像を見ていく上で不可欠な比重を占めるようになった。そのことは既存の体制そのものとの間に様々な軋轢を生じさせた

⁸³⁾ *Inbā' al-Ḥaṣr*, 471-472.

が、特にワクフ地の増加は、国家による一元的な土地税徴収権の掌握力の弱体化と、イクター制というマムルークによる農村の独占的支配を成り立たせていた土地制度の衰退と軌を一にする現象であった。かかる土地制度と社会システムの変容の中、マドラサの教授職や学生等のポストを占め、ワクフを通じて俸給や手当を獲得するウラマー層が直接的な恩恵を受けたのみならず、それまでイクター制を通じた大規模な土地所有からは基本的に排除されていたウラマーや官僚集団その他の富裕層が、ワクフ地の賃借人や管財人として土地経営に参画する道が開かれたことは確かである。しかしワクフの拡大を最も利用して権益を拡張したのは、ここでも従来からの支配層たるマムルーク、特にその上層部にあたるアミールたちであった。政治的経済的影響力で他者の追随を許さなかった彼らは、ワクフの設定、受益者としての編入、管財人職の掌握、ワクフ財の賃借といった様々なレベルで主体となる地位を占め、かかる活動を通じて富と社会的影響力を獲得した。すなわち、従来の存立基盤であったイクター制の衰退が進む中で、その元凶ともいえるワクフ制度もまた、軍人支配層がそれを通じて経済的・社会的パワーを握る、彼らの権力と支配を支える仕組みとして取り込まれたといえよう。換言すれば、軍事的支配体制の延長としての「マムルーク体制」の支配構造が、ワクフ制度を取り込むことによって補完され、維持されたのである。

ワクフは、続くオスマン朝のもとでもさらに発展を続けた。その中で国家の土地管理体制を如何に維持し、ワクフ地を如何にその統制下に置くかは国家の重要な課題であり、検地によるワクフ地の把握、ワクフ地からの徴税と国家の取り分の確保、ワクフ文書の提出義務づけなどを通じて、ワクフの「体制内化」が図られた⁸⁴⁾。その一方で、オスマン朝においても軍人層が最大のワクフ設定者であると同時にワクフ地の最大の賃借人でもあったことや、ワクフ管財

⁸⁴⁾ Cf. S. J. Shaw, "The Land Law of Ottoman Egypt (960/1553): A Contribution to the Study of Landholding in the Early Years of Ottoman Rule in Egypt," *Der Islam* 38/1-2 (1962): 110-116; J. R. Barnes, *An Introduction to Religious Foundations in the Ottoman Empire*, Leiden, 1986: 32-42; Behrens-Abouseif, *op. cit.*, 66; id. *Egypt's Adjustment to Ottoman Rule: Institutions, Waqf and Architecture in Cairo (16th and 17th Centuries)*, Leiden, 1994: 145-150.

人職の一部の高官への集中も見られたように、軍人支配層とワクフとの関わりは、本稿で明らかにしたマムルーク朝時代の特徴をそのまま見るることができる⁸⁵⁾。勿論、ワクフの一層の普及や国家の統制強化が見られたオスマン朝期の状況からも、一概に同一視することはできないが、ワクフの継続的發展と国家との軋轢、国家によるワクフ統制の試み、それと二律背反的に存在するワクフ制度を通じた軍人支配層による支配の強化という構図は、マムルーク朝後半期からの連続性の中に捉えることができ、ワクフの果たす社会的役割が不可欠な位置を占めるようになった「ポスト・イクター制」時代の国家と社会の在り方を理解する上で、一つの軸となる見方といえるだろう。

しかし、マムルーク体制の変容の全体像を明らかにするという意味では、本稿では十分に論じられなかった点も多い。例えば、ワクフの増加に伴うイクター制の衰退が、イクター授与と軍事奉仕の提供を軸として成り立っていたマムルーク軍人支配層内部の政治・権力構造に大きな影響を与えたことは疑い無い。また、マムルークがワクフ制度を通じて富と影響力を獲得したとはいえ、複数の管財人職を一手に握ったり、大規模なワクフ地賃借が可能であったのはスルターンと一部の有力アミールたちに過ぎず、低位の兵卒マムルーク軍人たちはそこから必ずしも十分な利得を引き出せた訳ではなかった。また書記官僚やウラマーの中でも、ワクフ権益を集積し、かかる有力アミールにも匹敵する政治的・経済的影響力を握る一部の有力者も出現した。これらのことは、軍人支配層としてのマムルークの二層分化と、有力ウラマーの台頭と影響力の拡大につながる、支配層の有り様を大きく変える問題であったといえるが、それについては今後考察を深めたい。

⁸⁵⁾ Cf. A. K. Rafeq (Rāfiq), “The Application of Islamic Law in the Ottoman Courts in Damascus: The Case of the Rental of Waqf Land,” Muhammad Khalid Masud et al. (eds.), *Dispensing Justice in Islam: Qadis and their Judgments*, Leiden, 2006: 415-416; id. “Isti’jār al-Arāḍi al-Waqfiya fī Bilād al-Shām bayna al-Madhāhib al-Fiqhiya wa-al-Fi’āt al-Ijtīmā’iyya,” M. Afifi et al. (eds.), *Sociétés rurales ottomanes*, Cairo, 2005: 87-89, 94; Hayashi Kayoko, “The *Vakıf* Institution in 16th-Century Istanbul: An Analysis of the *Vakıf* Survey Register of 1546,” *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko (the Oriental Library)*, 50 (1992): 95-98; Barnes, *op. cit.*, 43-44; R. Deguilhem, “WAKF, IV: In the Ottoman Empire to 1914,” *EF*², 11: 88-89.

史料と略号

- Awqāf Amir Qarāqjā Amīr Ākhūr : ‘Abd al-Laṭīf Ismā‘īl (ed.), “Wathīqat al-Amīr Ākhūr Kabīr Qarāqjā al-Ḥasanī,” *Majallat Kulliyat al-Ādāb, Jāmi‘at al-Qāhira* 18/2 (1956).
- Awqāf Amir Yūsuf al-Ustādār : Muḥammad ‘Abd al-Sattār ‘Uthmān (ed.), *Wathīqat Waqf Jamāl al-Dīn Yūsuf al-Ustādār: Dirāsa Ta’rīkhīya Athalīya Wathā’iqīya*, Cairo, 1983.
- Awqāf Sultan al-Ashraf Sha‘bān : Rāshid Sa’d Rāshid al-Qaḥṭānī (ed.), *Awqāf al-Sulṭān al-Ashraf Sha‘bān ‘alā al-Ḥaramayn*, Riyadh, 1994.
- Awqāf Sultan Barsbāy : Aḥmad Darrāj (ed.), *Ḥujjat Waqf al-Ashraf Barsbāy*, Cairo, 1963.
- Awqāf Sultan al-Nāṣir Ḥasan : Huwaydā al-Ḥārithī (ed.), *Kitāb Waqf al-Sulṭān al-Nāṣir Ḥasan b. Muḥammad b. Qalāwūn ‘alā Madrasat-hi bi-al-Rumayla*, Beirut, 2001.
- Awqāf Sultan al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn : Muḥammad Muḥammad Amīn (ed.), in Ibn Ḥabīb, *Tadhkirat al-Nabīh fī Ayyām al-Manṣūr wa Banī-hi*, vol. 2, Cairo, 1982.
- Awqāf Sultan Qalāwūn : idem (ed.), in Ibn Ḥabīb, *op. cit.*, vol. 1, Cairo, 1976.
- Awqāf Sultan Shaykh : Fahmī ‘Abd al-‘Alīm (ed.), in his *Al-Imāra al-Islāmiya fī ‘Aṣr al-Mamālīk al-Charākisa: ‘Aṣr al-Sulṭān al-Mu‘ayyad Shaykh*, Cairo, 2003.
- Awqāf Yaḥyā b. Ṭūghān : S. Conermann and S. Saghbini (ed.), in their “Awlād al-Nās as Founders of Pious Endowments: The Waqfiyah of Yaḥyā ibn Ṭūghān al-Ḥasanī of the Year 870/1465,” *Mamlūk Studies Review* 6 (2002).
- Badā’i* : Ibn Iyās, *Badā’i al-Zuhūr fī Waqā’i al-Duhūr*. Muḥammad Muṣṭafā (ed.), 5 vols., Wiesbaden, 1960-75.
- Badr* : al-‘Aynī, *Ta’rīkh al-Badr fī Awṣāf Ahl al-‘Aṣr*. London, British Library, MS Add. 22350.
- al-Badr al-Zāhir* : Ibn al-Shīḥna, *Al-Badr al-Zāhir fī Nuṣrat al-Malik al-Nāṣir Muḥammad b. Qāyṭbāy*. ‘Umar ‘Abd al-Salām Tadmurī (ed.), Beirut, 1983.
- al-Buṣrawī* : al-Buṣrawī, *Ta’rīkh al-Buṣrawī*. Akram Ḥasan al-‘Ulābī (ed.), Damascus, 1988.
- Ḍaw’* : al-Sakhāwī, *Al-Ḍaw’ al-Lāmī li-Ahl al-Qarn al-Tāsi‘*. 12 vols., Cairo, 1934-37.
- Dīwān al-Inshā’* : anon. *Dīwān al-Inshā’*. Paris, Bibliothèque Nationale, MS Arabe 4439.
- Duwal al-Islām* : Abū Ḥamid al-Qudsī, *Kitāb Duwal al-Islām al-Sharīfa al-Bahīya wa Dhikr mā Ḍahara li min Ḥikam Allāh al-Khaṭīya fī Jalb Ṭā’īfat al-Atrāk ilā al-Diyār al-Miṣrīya*. Ṣubḥī Labīb and U. Haarmann (eds.), Beirut and Berlin, 1997.
- DW: Waqf Deeds, Dār al-Wathā’iq al-Qawmīya, Cairo.
- Ḥadā’iq* : Ibn Kinnān, *Ḥadā’iq al-Yāsmīn fī Dhikr Qawānīn al-Khulafā’ wa-al-Salāṭīn*. ‘Abbās Ṣabbāgh (ed.), Beirut, 1991.
- Ḥawādith* : Ibn Ṭaḡhrībirdī, *Ḥawādith al-Duhūr fī madā al-Ayyām wa-al-Shuhūr*. (1): William Popper (ed.), 4 vols., Berkeley, 1930-42. /(2): Fahīm Muḥammad Shaltūt (ed.), vol. 1, Cairo, 1990.

- Ḥawādith al-Zamān* : Ibn al-Ḥimṣī, *Ḥawādith al-Zamān wa Wafayāt al-Shuyūkh wa-al-Aqrān*. ‘Umar ‘Abd al-Salām Tadmurī (ed.), 3 vols., Beirut, 1999.
- Ibn Ḥijjī* : Ibn Ḥijjī, *Ta’rīkh Ibn Ḥijjī*. Abū Yaḥyā ‘Abd Allāh al-Kundurī (ed.), 2 vols., Beirut, 2003.
- Ibn Qāḍī Shuhba* : Ibn Qāḍī Shuhba, *Ta’rīkh Ibn Qāḍī Shuhba*. ‘Adnān Darwīsh (ed.), 4 vols., Damascus, 1977-97.
- Inbā’ al-Ghumr* : Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī, *Inbā’ al-Ghumr bi-Abnā’ al-‘Umr*. Ḥasan Ḥabashī (ed.), 4 vols., Cairo, 1969-98.
- Inbā’ al-Ḥaṣr* : al-Ṣayrafī, *Inbā’ al-Ḥaṣr bi-Abnā’ al-‘Aṣr*. Ḥasan Ḥabashī (ed.), Cairo, 1970.
- ‘Iqd* : al-‘Aynī, *‘Iqd al-Jumān fī Ta’rīkh Ahl al-Zamān*. (1): ‘Abd al-Rāziq al-Ṭanṭāwī al-Qarmūṭ (ed.), Cairo, 1985./ (2): idem (ed.), Cairo, 1989.
- Izhār* : al-Biqā’ī, *Izhār al-‘Aṣr li-Asrār Ahl al-‘Aṣr*. Muḥammad Salīm b. Shadīd al-‘Awdī (ed.), 3 vols., Riyad, 1992-93.
- Jawāhir* : al-Asyūṭī, *Jawāhir al-‘Uqūd wa Mu’in al-Quḍāt wa-al-Muwaqqi’in wa-al-Shuhūd*. 2 vols., Cairo, 1955.
- Khiṭaṭ* : al-Maqrīzī, *Al-Mawā’iz wa-al-‘Iṭibār fī Dhikr al-Khiṭaṭ wa-al-Āthār*. Ayman Fu’ād Sayyid (ed.), 5 vols., London, 2002-04.
- Mufākaha* : Ibn Ṭūlūn, *Mufākahat al-Khillān fī Ḥawādith al-Zamān*. Muḥammad Muṣṭafā (ed.), 2 vols., Cairo, 1962-64.
- Muqaddima* : Ibn Khaldūn, *Muqaddimat Ibn Khaldūn*. M. Quatremère (ed.), 3 vols., Paris, 1858; 森本公誠 (訳), イブン・ハルドゥーン『歴史序説』全4巻, 岩波文庫, 2001年.
- Nayl* : ‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Nayl al-Amal fī Dhayl al-Duwal*. ‘Umar ‘Abd al-Salām Tadmurī (ed.), 9 vols., Sidon and Beirut, 2002.
- Nihāya* : al-Nuwayrī, *Nihāyat al-Arab fī Funūn al-Adab*. 33 vols., Cairo, 1926-98.
- Nujūm* : Ibn Taghrībirdī, *Al-Nujūm al-Zāhira fī Mulūk Miṣr wa-al-Qāhira*. Fahīm Muḥammad Shaltūt et al. (eds.), 16 vols., Cairo, 1963-72.
- Nuzha* : al-Ṣayrafī, *Nuzhat al-Nufūs wa-al-Abdān fī Tawārīkh al-Zamān*. Ḥasan Ḥabashī (ed.), 4 vols., Cairo, 1970-94.
- Rawḍ* : ‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Al-Rawḍ al-Bāsim fī Ḥawādith al-‘Umr wa-al-Tarājim*. Vatican, Biblioteca Apostolica Vaticana, MS Vaticano Arabo 729.
- Ṣubḥ* : al-Qalqashandī, *Ṣubḥ al-A’shā fī Ṣinā’at al-Inshā’*. 14 vols., Cairo, 1913-22.
- Sulūk* : al-Maqrīzī, *Kitāb al-Sulūk li-Ma’rifat Duwal al-Mulūk*. Muḥammad Muṣṭafā Ziyāda et al. (eds.), 4 vols., Cairo, 1939-73.
- Tahrīr* : al-Balāṭunusī, *Tahrīr al-Maqāl fīmā Yaḥill wa Yaḥrum min Bayt al-Māl*. Faṭḥ Allāh Muḥammad Ghāzī al-Ṣabbāgh (ed.), al-Manṣūra, 1989.

Ta'liq : Ibn Ṭawq, *Al-Ta'liq: Yawmīyāt Shihāb al-Dīn Aḥmad b. Ṭawq*. vols. 1-3, Ja'far al-Muhājir (ed.), Damascus, 2000-04.

Ta'rīf : Ibn Khaldūn, *Al-Ta'rīf bi-Ibn Khaldūn wa Riḥlat-hi Gharban wa Sharqan*. Muḥammad b. Tāwīt al-Ṭanjī (ed.), Cairo, 1951.

Taysīr : al-Asadī, *Al-Taysīr wa-al-Itibār wa-al-Taḥrīr wa-al-Ikhtibār fīmā Yajib min Ḥusn al-Tadbīr wa-al-Taṣarruf wa-al-Ikhtiyār*. 'Abd al-Qādir Aḥmad Ṭulaymāt (ed.), Cairo, 1968.

Tibr : al-Sakhāwī, *al-Tibr al-Masbūk fī Dhayl al-Sulūk*. Cairo, n.d.

WA : Waqf Deeds, Wizārat al-Awqāf, Cairo.

Wajīz : al-Sakhāwī, *Wajīz al-Kalām fī al-Dhayl 'alā Duwal al-Islām*. Bashshār 'Awwād Ma'rūf et al. (eds.), 4 vols., Beirut, 1995.

付記 本稿は、平成17～19年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

“Japan in East Asia” have drawn a rich historical portrait. There are, of course, points among their conclusions that deserve high evaluation, but in the approach of creating an “East Asian History” that is the stage for Japan, I feel there has been an overemphasis on the vision of the Tang dynasty as tilted toward the East. In my recent book *Shirukurôdo to Tôteikoku* (The Silk Road and the Tang Empire), by Kôdansha, I have advocated the resurrection of the proper view of “Tang dynasty of the Eurasian continent,” rather than the antithetical view of “Tang dynasty of East Asia” and have tried to describe this view. This article supplements the arguments that were not fleshed out in that work. In other words, in order to investigate how educated figures of the Tang recognized the geography of Eurasian world, in which Asia occupied the core, I made use of a map of the Asian world recorded in Chinese and Tibetan, as noted above. Furthermore, I analyze the well-known “theory of the four lords (sons of heaven) in the world”. I then bolster my argument in the book that Tang was an empire situated in the eastern portion of the Eurasian continent and its relationship with central Eurasia through the overland Silk Road was most important, and at the same time I advocate expanding our perspective beyond the framework of “Japan in East Asia” to move toward “Japan and the Eurasian world.”

THE MAMLUK REGIME AND *WAQF*: THE STRUCTURE OF THE MILITARY RULE IN THE PERIOD OF THE DECLINE OF THE *IQṬĀ'* SYSTEM

IGARASHI Daisuke

With the implementation of the highly systematic and well organized *Iqṭā'* system, which depended on the completion of the cadastral survey (1313-25), referred to as *al-rawk al-Nāṣirī*, in Mamluk ruled Egypt and Syria (1250-1517), the Mamluk state and political system were constructed on this foundation. In this manner, the regimes of foreign military rulers, which were based on the *Iqṭā'* system, which had been developed in the Arab-Muslim world since the latter half of the tenth century, reached an apex in the highly systematized Mamluk regime. As the fundamental land system of the period, the *Iqṭā'* system served as the axis of political, military and governmental systems and formed the system that was the core of the ruling structure in which the Mamluks, who comprised the ruling class, controlled rural areas through possession of the *Iqṭā'* lands and thereby held a grip

on the supply of food, public works, economic and religious activities of the cities through the redistribution of the wealth obtained from the rural areas, and this influence reached throughout the entire society.

However, the rapid expansion of the amount of land designated as *waqf* (religious endowment) following the latter half of the fourteenth century had a great influence on the Mamluk regime. This was not limited to the fact that due to the transformation of the state's land (*amlāk bayt al-māl*) into the *waqf*, the amount of land that could be distributed for the *Iqtā'*s was decreased and the economic foundation of the Mamluks continued to shrink. The increasing importance of the *waqf*, which was fundamentally independent from state control, as a self-regulating system for the redistribution of wealth that linked the cities and rural areas is thought to be link to the problem of relativizing and reduction of the social role of the *Iqtā'* system.

From this point of view, I employ narrative and archival sources in this study to consider the sudden expansion of the *waqf*, whose social role from the late fourteenth century to the early sixteenth century in Egypt and Syria reached a stage that could not be ignored, the influence of the expansion of the *waqf* on the Mamluk regime, and amidst these factors, how the Mamluk military ruling class maintained the ruling structure, particularly in regard to the economic aspect. As a result, I make clear that they were involved at various levels in the *waqf* system, as donators and beneficiaries, as administrators, and as leaseholders of *waqf* land, and thereby they were able to obtain wealth and social influence and were also able to maintain the Mamluk regime of ruling structure by incorporating the *waqf* system within it.